

都市空間の構想力

空間文化
の博物館

東京

第4回

東京大学 都市デザイン研究室

振れながら延びていくグリッドの街路網（杉並区西荻北）



街路ネットワークの「意図」を シークエンスとして捉える

西村幸夫（東京大学教授）

トップダウンの「思想」ではなく、細部を重視する「意図」が空間に色濃く反映される点はすぐれて日本的だといえる

グリッドハタンが伝える
大きな「思想」

ギリシア・ローマの古代都市の時代から世界にはさまざまな格子状の道路網。グリッドパターンがある。古代中国の都城もスペインの植民都市もグリッドでできている。アメリカ近代都市の徹底したグリッドパターンは日本人にもなじみがあるだろう。

グリッドパターンが都市の街路パターンとして古今東西を通して最も普遍的なものであるわけは誰でも容易に想像できる。測量が用意であり、見た目もわかりやすい。土地取引上の技術的な簡便さからもグリッドは優位である。

他方、グリッドはいかにも無思想、

無節操に機械的に単一の道路パターンを土地の基盤とは無関係に引いていたかのような印象を与えるのもたしかである。

しかし、グリッドが意味するものは都市建設上の技法だけではない。ましてや都市建設の安直さなどではない。グリッドはひとつの「思想」の伝達手段なのである。

平安京の坊条制や条里制の田圃を思い浮かべていただくと明らかだろうに、こうしたグリッドは時の権力の支配が貫徹していることを示す政治的な装置であった。

また一方で、バルセロナの新市街やアメリカ開拓地のグリッドのように自由と平等の「思想」を物理的に表現した道路パターンもあった。グリッドは封建制あるいは一街路

の制圧」からの解放を意味してもいい。

印象的なバルセロナのグリッドパターンをデザインした土木技師イルデフォンソ・セルダはまた、「都市計画」という用語の生みの親であった。都市計画という思想が、グリッドパターンを構想した土木技師の脳裏に胚胎したという事実はとりわけ示唆的である。

グリッドハタンが示す

空間構想の「意図」

一方でグリッドはそのスケールによって意味するものが異なってくる。直交する街路が切り取る街区の大きさは、主要街路の配置の結果であると同時に、ひとつひとつの敷地単位を想定し、その積み重ねの結果でもある。個々の敷地単位にはどのような建物が建ち並ぶかに関しては当然ながらあらかじめ想定しておかなければならないことになる。

つまり、街区の規模はそこまでの都市空間の構想の「意図」を表出しているものでもあるのだ。

東京の街路風景と その細部重視性向

東京においても組屋敷のグリッドや町家地区のグリッドなど城下町時代の道路パターンをはじめとして、耕地整理のグリッドや土地区画整理のグリッドなど多様なグリッドを見ることができている。

なかでも興味深いのは、グリッドの道路システムが、色の「思想」で貫徹されているのではなく、計画時期の相違や地形的な特色などによって食い違いやずれ、ゆらぎが生じ、

そうした「意図」がグリッドに別次元の興趣を添えている点である。

たとえばサンフランシスコのグリッドは高低差の激しい地形とは無関係に引かれることによって緊張感のある都市風景を醸し出しているのに対して、本号でとりあげた東京の上地区画整理でできたグリッドは外的要因に応じて融通無碍にグリッドを伸縮させ、個々のミクロな街路風景に細かな差異を生んでいる。

トップダウンの「思想」ではなく、細部を重視する「意図」が空間に色濃く反映される点はすぐれて日本的だといえる。

グリッドパターの細分化が進められた事例が散見されるのも、ミクロの土地利用からマクロの都市構造を見直すという細部にこだわる日本的プランニングの特徴を示している。そしてこうした見直しの背景にはおそらく、街区内の建物配置や町並みの構成をイメージした街区の空間像とその変化があるといえる。

細部から構築される街路パターの「意図」はグリッドに止まらない。自然発生的な歴史的街路が演出する

細部空間処理の多彩なボキャブラリーは、単純に魅力的な小空間を創り出しているというだけでなく、個々の独立した空間デザインが主体たる人間の動きとともにある特定のシークエンスを形成し、それらがまとまってひとつの空間体験をかたちづくるといった動的な空間構成の計画技法にまで高まっているとみることができ。これこそ日本的な空間の構想の姿ではないか。

都市空間の構想力をシークエンスに動く目でとらえる必要があることを私たちはここでの作業を通して教わったのである。

注

1. ル・コルビュジエ著、坂倉準三訳「輝く都市」鹿島出版会、1968年、116頁。
2. 都市開発・都市計画をあらわすスペイン語（urbanizar）はセルダの著書「都市計画の一般理論」（1867年）において初めて用いられた。この語がフランスに渡りEurbanismeとなり、世界へ広がることになる。
3. 加藤政洋「花街 異空間の都市史」朝日選書、2005年参照。この異空間がほぼ例外なくグリッドで計画されている点も興味深い。

●街区分割がグリッドパターンを方向付け、街の性格を決定づける

一見、無機質のように見えるグリッドも、近づいて見ると、街路幅員や街区形状、建築物の建ち方などにより違った風景を醸し出している。さらに、近づいてみると、街区分割のような微細な変化の体系が、グリッドの性格にさらなる変化を与えていることがわかる。

図1 現況の銀座と京橋
中央通りに対する街区分割の方向が異なる。

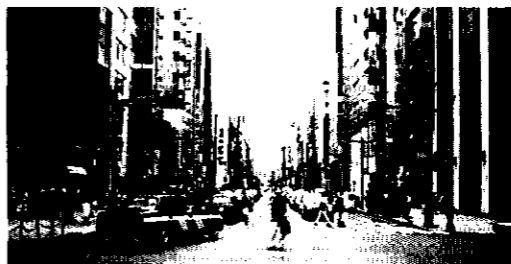


図2 江戸時代の街区割
銀座も京橋もかつては正方形街区であった。京橋の東側では掘割が正方形の内部にまで延びていた様子がわかる。

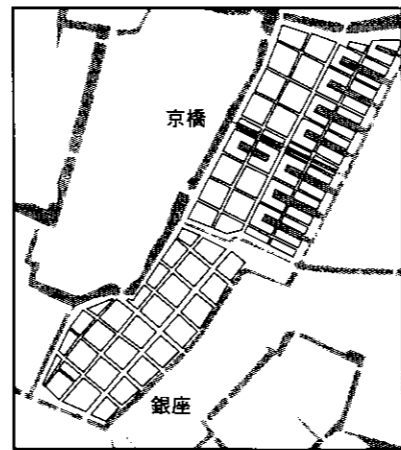


図3 グリッドの骨格を成す銀座通り

●同じグリッドを基調とする二つの街

グリッドパターンが都市に構想される時、ある単純なグリッドパターンがモデルとして想定されるかもしれない。しかし、実際にはそのような無機質グリッドが姿を現すことはない。そこでは、1街区の大きさと形状、2軸線の方向、3方位、4街路の幅員や構成（強弱）、あるいは、5その上に立つ建築物のあり方や土地利用、6都市施設との関係などの要素における差異が、グリッドの中に特質を与える要因として働き、これらの組合せや変化の順序によって、同じように見えるグリッドパターンも多様化してゆく。

時に、グリッドパターンに小さな改変が加わることで、同じような形状をもつ地区の特質に差異が生まれてゆくことがある。江戸東京における代表的な下町グリッド、とりわけ中央区にある銀座と京橋は、隣り合って存在しているものの、現在では、雰囲気異なるグリッド都市となっている。江戸時代には、同じ60間グリッドを基調として同じような形状をしていたこの二つの街を特徴づけたものは何だったのであろうか。

●異なる街区分割の方向

江戸時代初頭、京間60間の正方形グリッドが、日本橋から銀座にかけて造成された（図2）。正方形街区は1657年明暦の大火以降、宅地不足解消の為、街区の中心部に新しい街路が通され敷地分割が起こる。具体的には敷地の背割線に2本の道を通して正方形街区を3等分して、長方形街区を造成した。そして、街区分割によって、銀座と京橋ではある決定的な違いが生じる。銀座は、日本橋通り（現在の銀座通り）を中心軸として、街区長辺が並ぶように分割するのに対して、京橋は軸に対して、街区短辺が並ぶように分割される。銀座では、日本橋通りを基準に街区分割が発生したと考えられ、京橋では東側の河岸のあった掘割の埋立に合わせたのだろうか。銀座とは異なる方向に街区分割が起こり、街区形状の異なる街同士となった。

●街路軸の方向と街のきざい

現在の銀座と京橋を歩くと、銀座は、晴れやかな表通りと細やかな裏通りといった表裏の性格が顕著なのに対して、京橋は、にぎわいが等しく分布す

る通りが網目のように入っているという違いがわかる。この違いは、グリッドの中でも主軸となる大通りと、先の街区分割が起きた方向性との関係の中に見えてくる。

街区分割が主軸（銀座通り）に対して平行に入る銀座では、分割街路は表通りに対して裏の性格を自然と持つてしまう。ただし、この分割街路は、軸線に平行に長辺方向がずっと続くため、裏でありながらも、人々の行き交うにぎわいは保持される。また、東西街路が60間ごとにはかないため、東西に移動する街路選択性が少なく、自然と東西方向の横の動線が他の市街地よりも成立しており、分割街路で20間ごとに分節されても、表として街路空間が展開している。

一方、軸線方向に鉛直な街区分割である京橋では、主軸は20間ごとに分割されてしまい、表の性格が薄まるだけでなく、東西に向かう横方向の動線の選択肢が多く、とくに重要性の高い街路は顕著でないため、分割街路も含めて、均質な自由さを保持している。実際、銀座の街路幅員構成は、かつての60間グリッドの街路かどうかの影響し

ているのに対して、京橋の街路幅員は、かつての60間グリッドの影響が少ない。

●細やかな分割による二重性

このグリッドを建物の建ち方といったもつと近いスケールで眺めると、さらに違った体系が見えてくる。銀座では、概ね街路方向に沿って、隙間無く建物が建ち並んでいる（図8）。街区構成を体現した町並みをつくっている。一方、京橋は街区の短辺方向を貫く路地が多く存在しており、分割街路の方向とさらに90度向きを変えて建物が連なる（図9）。街区内部への建物の並びは、建物や敷地規模の狭小さが影響して起きている。

ここでの街区を貫通する路地は、見かけ上の街区分割を引き起こし、グリッドシステムの援用をより近いスケールで行っている。図8、9に示した矢印は、グリッドの作り出す相似的關係を示している。そのため、京橋は細やかな都市スケールの変化をより感じ取ることができるといえる。

（中島伸・野原卓）

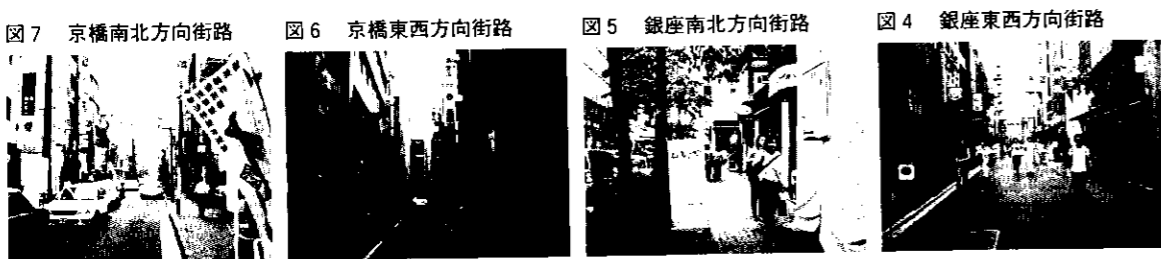


図9 建物の並び方と街路・路地の関係が互い違いの入子となって広がる。そのため、街路の選択性が豊富・京橋

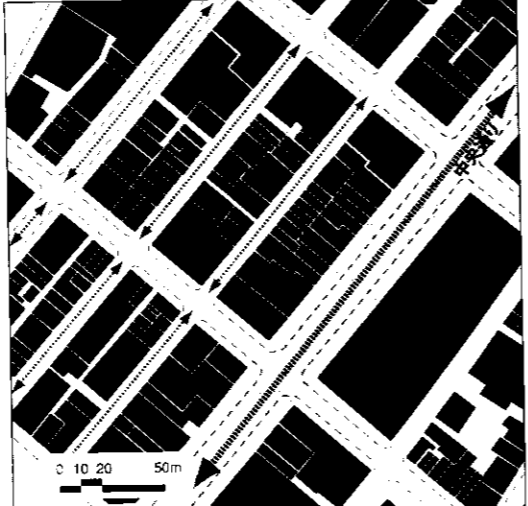


図7 早稲田鶴巻地区

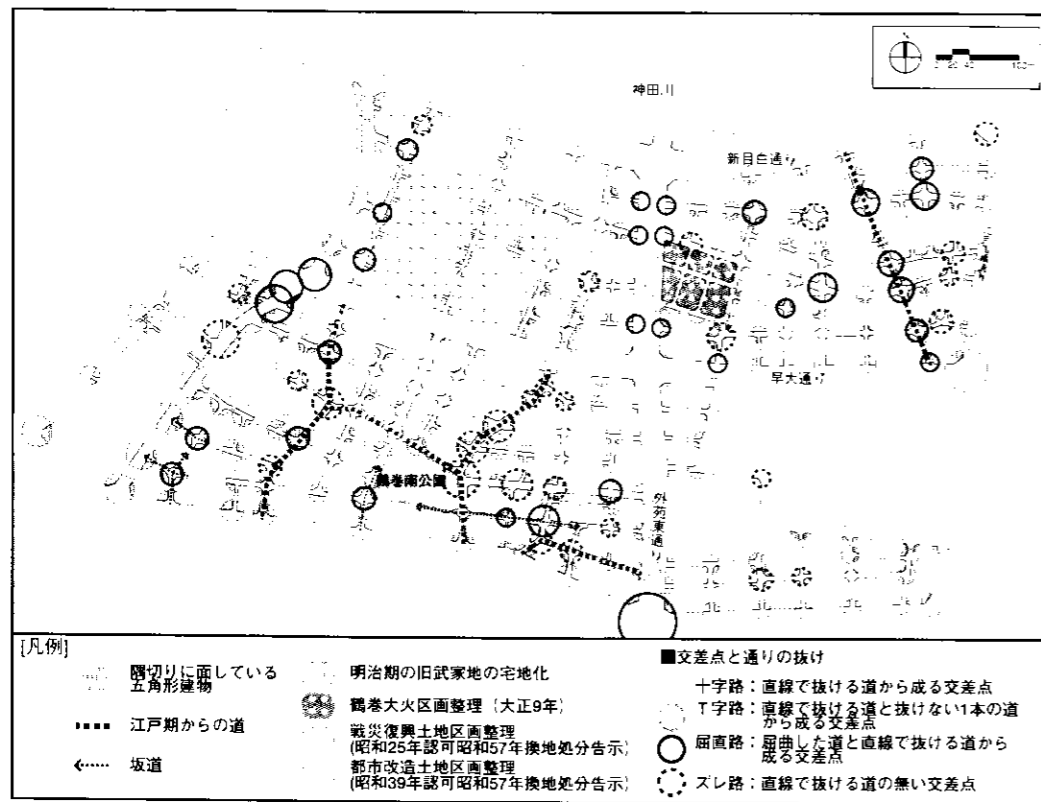


図2 明治期に開発された街区



図4 開発時期のズレがT字路をつくる



図6 隔切り (新宿駅前区画整理)



図1 地形に合わせた屈曲街路 (図4まで早稲田鶴巻)



図3 街路のズレの集合

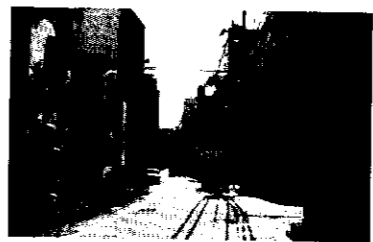


図5 隔切り



●与条件との調整が均質なグリッドに動きを与えろ。わが国のグリッドは、完全なる理念で構成されているというよりも、むしろ、現実の都市空間との「調整」によって変化し、いわば不完全な「現実主義グリッド」である。この、不完全なグリッドによって、静的なグリッドは動きあるものへと変貌する。

●歴史と地形が「くずし」を生む

グリッドという手法は、白紙の都市空間形成手法としては、とても汎用性の高いシステムである。しかし、近代以降の都市形成において、全くの白紙の都市というのは稀であり、(地形などの) 自然的な抑揚や、何らかの人為的な空間への介入行為が既に存在している。これらの現実空間に適応するための「調整」は、理念的なグリッドを変形させ、多様で動きのある空間形成を引き起こす。本稿では、そうしたグリッドパターンに与えられた動きについて見てみよう。

新宿区早稲田鶴巻地区は、主に戦災復興区画整理で整えられた町並みである。歴史的に見ると、現況の鶴巻公園の脇を通る道はかつて、神田川畔へ下る農道であった。区画整理事業ではこの道の曲線を修正し、屈曲街路に変えただけで、新たに造り替えることはなかった。

さらに地形に注目して見ると、地区の南側の早稲田通り付近で高低差が生じている。この地形差に対して、街路は屈曲しており、地区外部から内部が見え隠れするようになっていく(図1)。

1) そのため、城壁等のないオープンエンドなグリッドの性格を維持しながら、内部に半閉鎖的な空間が生まれている。グリッドの下地である地形との調節によるグリッドのくずしによって、本来持ち得なかった多様な「動き」が付与される。

●開発時期の異なるグリッドがパッチワークとなる

グリッドは、ある時期に一定の地区をまとめて開発することで街区の連なりを確保する手法でもある。しかし、開発時期のずれによりそれぞれが独自の空間を持ちつつ、前の開発を条件として、全体を一つのまとまりある空間とすることがある。

神田川沿いの北側低地部分に注目して見ると、実はこの辺りが四つの開発時期の異なるグリッド街区によって形成されており、場所ごとに空間的特質を異にすることがわかる。

とりわけ西側の長方形街区が並んでいる明治期に旧武家地を開発してできた街区と、その他の時期に開発された街区ではその特質が異なる(図2)。まず、街路幅員が異なる。明治期に開

発された街路は幅員が狭く、通過交通も少なく、静かな閉じた空間となっている。また、明治期に開発された街区では交差点に隔切りがなく、建物は街路に近接して建っているため、街路景観に親密さを与えている。

さらに平坦な北部を見ると、街路が少しずつ屈曲して「一ずれ一」であったり、T字路によって視線が抜けない箇所が多くあることに気がつく(図4)。

これらの視線の抜けない交差点は、開発時期の異なる街区の境界部にある(図3)。T字や屈曲を用いた各交差点は、各領域の緩衝装置として各街路を受け止める。そして、この街路の一ずれ一によって、街路景観は、緩やかに閉じられ、小さなまとまりをもつ。こうした小さな個性のパッチワークの中にあっても、グリッドは、全体として違和感のないつながりを維持するよう、全体と個の関係を調節し、領域をまとめあげている。

●隔切りのまちかどが彩をつくる

また、区画整理の技術の中には、グリッドの交差点に一定の空間的まとまりを生み出す「隅切り」というものが

ある。これは、自動車交通を含めた安全性と見通しの確保と同時に防災性能の向上も見据えて、交差点を斜めにカットするものである。特に戦災復興時の隅切りでは、美観や保健的価値を意識した設計思想を背景に、小広場の空間が想定され、以前よりも大きくカットされた。

結果、カットされた各辺によって囲まれた交差点には、新たな「まちかど」の領域感が発生している。隅切り部分に対する敷地側の対応も多様である。例えば、商業地である新宿駅北側の区画整理空間の隅切りを見ると、各店舗の入口をこの隅切り部分に設けることで、賑わいあるまちかど空間がつけられている(図6)。

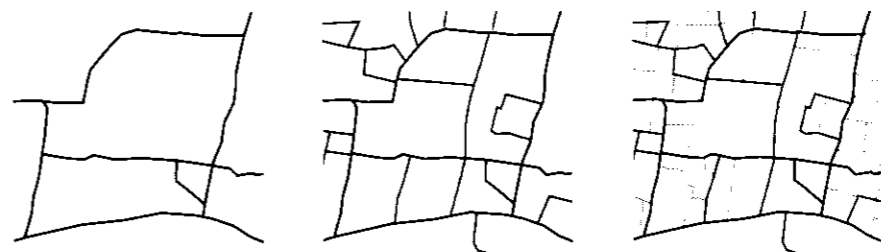
このような領域感を伴った交差点の連続は、単調な直線街路に対してアクセントとなっており、現実の街路空間ににぎわいと動きを与えている。そして、このようなまちかどづくりは、まちの小さな景観を向上させる可能性を秘めているのである。

(中島伸・野原卓)

●不規則な道の網目が界隈に多様な表情を織り込む

農村を下地として市街化された地域では、明快な街路パターンが見出し難いが、場に応じて領域が細やかに関係づけられる中で、随所に多様な景が散りばめられ、界隈に豊かな表情が織り込まれる。

図1 不規則な街路網の形成過程（新宿区上落合）



〈江戸末期〉 農村が市街化されるにしたがって、古い道筋（骨格）から徐々に道が派生し、全体として不規則な街路網が出来上がる。

図4 骨格となる古い道筋に見られるT字路の連なり（渋谷区西原）



古い道筋（骨格）沿いにT字が連続して現れる

図3 骨格に取り付くT字路（同上）



図2 古い道筋のゆらぎ（渋谷区西原）



●時を重ねて出来上がる網の目

一度に計画されて出来上がったグリッドのような規則的な街路網に対し、時間の流れの中で、古い道筋をもとに派生的に形成された街路網は、一定のパターンを見出し難い不規則なものとなる（図1）。

そこには、街路網としての明快さは見られないものの、個別解を積み重ねるように形成された道の網目は、細やかな場の条件に応じた景を随所に生み出し、それらを多様に結びつける。網目の細部に空間的・景観的アイデンティティが多様に織り込まれることで、境界の表情はより厚みをもったものとなる。

●網を統べる骨格

いかに不規則な街路網と言えども、必ず「骨格」と言うべき道がある。それらの多くは、近世以前からの道筋であり、もともとは都市化されていない、農村の道であった。道は、離れた地点をつなぐ機能と、一定領域を区画する機能を持つものであるが、骨格となる道は、本来前者の性格が強い道である。

離れた場所をつなぐ道は、まっすぐに引かれる必要はない。土地の微細な起伏などの条件に応じて引かれた結果、これらはしばしば折れ、曲がり、ゆらぐ。これらの沿道に建物が建ち並び、時折前方の視線はまっすぐ抜けず、進みつつ先の風景を追うようなシークエンスが展開する（図2）。

先が見えないながらも、続く道であることが予感され、そのことで、骨格となる道であることが認識される。また都市化が進むと、往來の多いこれらの道筋には店舗が連なり、近隣商店街としての様相を呈する。景観的にも機能的にも、骨格としての特色を備えるのである。

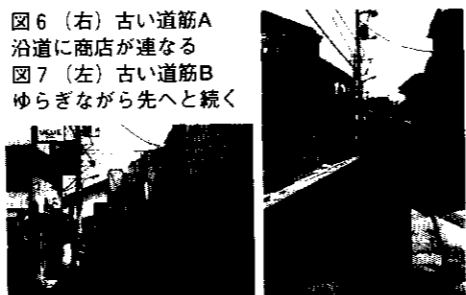
一方で、骨格となる古い道筋には、随所で片側に横道が派生する。これらの横道は、骨格の背後にひとまとまりの領域を切り拓く。派生的な道が骨格を貫通することは稀であり、骨格に対してT字路の形態をとる（図3）。

これは骨格のもとに、枝葉のように領域が取り付いていることの現れであり、骨格に見られるT字路の連なりは、このようなヒエラルキーを明瞭に示している（図4）。

図5 迷路のような街路網における古い道筋（練馬区春日町4丁目）



図6（右）古い道筋A沿道に商店が連なる
図7（左）古い道筋Bゆらぎながら先へと続く



地図上では複雑に見える街路網も、実際に歩いてみると、「骨格」となる道筋が、その線形や沿道建物の表情から識別できる。

図10 アイストップ（足立区西新井本町1丁目）
図9 小さな階段（新宿区北新宿2丁目）
図8 不整形な叉路（荒川区荒川7丁目）

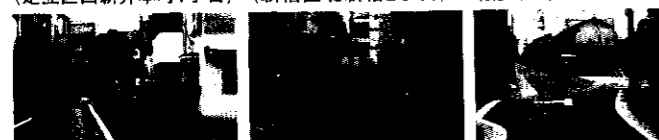
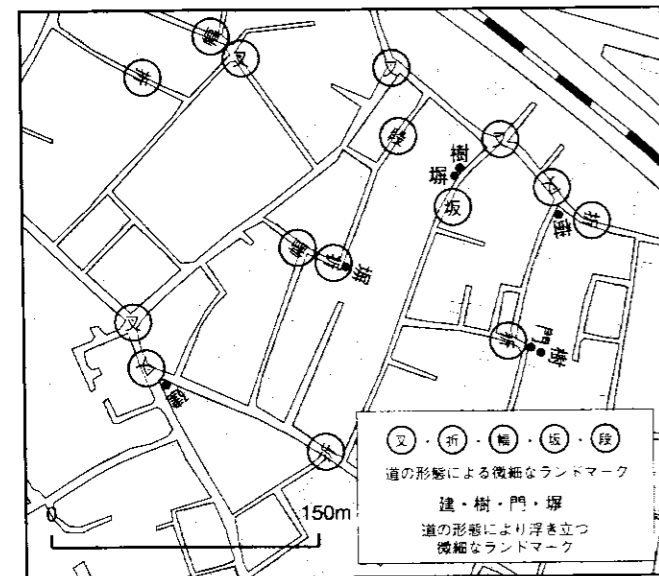


図11 不規則な街路網に散りばめられた微細なランドマーク（新宿区北新宿3丁目）



●織り込まれた微細なランドマーク

街路網が不規則な場合、全体の構造を一度に把握しづらなことが多い。そのような中で、空間認識に手がかりを与えてくれるものに、小さいながらも何らかの印象を与えるランドマークがある。これらは、個々の場の条件に応じて漸進的に街路網が出来上がった結果、局所的な景が特色を持つようになったものである。

街路そのものの形態が特色を持つ場合、それ自体が潜在的なランドマーク性を有すると言えよう。以前に取り上げた軸線が振れる地点（第1回・本妙寺跡）や不整形な叉路（第3回）の他、地形に応じた道の折れ曲がりや坂道

も、局所的な景を特徴づける（図8・9）。

一方でこのような変則的な街路形状は、沿道の建物や構築物、樹木などの見え方にも影響し、これらにランドマーク性を付与する（図10）。T字路や道の折れ曲がり地点においては、視線が抜けず、前方をさえぎる要素が目にと留まる。また不整形な叉路においても、角地の建物などの要素が印象を左右する。

このようなランドマークは、都市の多くの人々に共有される公共的な存在とは限らない。むしろ、生活者が自らの行動経路の中で何気なく認識し、生活領域の手がかりとして捉えるような、微細な場の標（micro-landmark）である（図11）。

これらの小さなランドマークとなる場所は、塀や門構え等の設え、植栽など、居住者自らのちょっとした工夫と配慮で、彩りを加えることができる。細やかかつ多彩なランドマークが、網目の中に散りばめられることで、入り組んだ界隈に、より豊かな表情を与えることができる。

（永瀬節治・後藤健太郎）